

戦争を教える―日本兵とドイツ兵の戦争経験比較

小野寺拓也

tonodera@tufs.ac.jp

【0】はじめに―いま戦争の何を教えるべきなのか？

・岐路に立つ平和主義:「侵攻する意図はない」という公然たる嘘、むき出しの軍事力行使、核による威嚇が現実の問題に。話し合う気のまったくない相手国にどのように対峙すべきなのか？ 人権、民主主義、法の支配、少数派の保護を一定程度の軍事力によって守るという緊張関係。

・「われわれは何のために力を養い、行使するのか。対抗する過程で相手に似てこないか。向こう10年は、不可避な力の行使をしながら、その目的合理性が常に問われる、厳しい時代となろう」(遠藤乾) <プーチン氏に抗う力、問う時代 自由社会が独裁と似ぬよう、目的つねに自問を、2002年3月1日『朝日新聞』>

・「戦争の悲惨さを伝える」だけで十分なのか？ 「戦争はいけない」のさらにその先として、伝えるべきことは何なのか？

・自国史の負の側面と正面から向かい合う。「神話はノイローゼの症状であるだけでなく、同時にまた、心理的に耐えられない現実に対する防壁であり、避難所、感情の要塞でもあるからだ。その働きは、傷が治癒に不可欠のかさぶたを形成するのと同じ」である(シヴェルブシュ 2007: 29) 高校・大学の教育現場においても、今なお困難な課題。避けがたい感情的反発。ただし比較史の観点も忘れない。

・本報告の焦点:どのように戦時暴力を語るか？(敵イメージを論じた、歴史学研究会編『歴史総合をつむぐ』(小野寺 2022)の続編)

・前線と銃後の最大の差違:人を殺すという行為が称揚され、要求される→どのような暴力は前線と銃後の間でコミュニケーション可能で、どのような暴力は可能ではなかったのか？日独でその語りはどの点で共通し、どの点で異なっていたのか？ その史料としての野戦(軍事)郵便<対照的な史料としての、捕虜盗聴記録(ナイツェル/ヴェルツァー2018)>。

【1】野戦(軍事)郵便という史料

・検閲をめぐって:第二次大戦期には、秘密保持の観点から日独ともに実施。ドイツは、野戦郵便検査所が抜き取り検閲→「検閲済み」スタンプを押して「銃後」へ。一日あたり 2500 万通が行き交う→実際に検閲にかかるのはまれ。「迂回路」の存在/軍紀維持の観点から、大目に見る軍指導部方針。日本は直属の上官が検閲/法務官・憲兵による抜き取り検閲<1942年北支那覇権憲兵隊による検閲月報:(八月)取扱数 331万 1562通、検閲件数 29万 2853通、処置件数 241件。(九月)290万 3100通、検閲件数 27万 9571通、処置件数 423通。うち押収 26通、切除抹消 242通、発送 41通、局長処置返送 41通、その他 23通>

(史料)「点呼の時、S軍曹から手紙に関する注意があった。

『……一言注意しておく。手紙の中に行軍が辛いということを書く者が多々あったが、そうでなくとも心配しておられる内地の人たちはどんなに思うだろうか。お前たちが書かなくとも行軍の辛いことぐらいは、『麦と兵隊』[1938年に出版された火野葦平による従軍記]やなんかで、内地の人も知っている。それからこの頃はネギばかり食わされてうんざりするとか、みんなネギの屁ばかりしているとか、こんなこともどうかと思う。兵隊は兵隊らしく、自分も元気でやっている、どうか銃後のことを頼むとか、淡泊な手紙が一番良い』。そうすると、僕の手紙は皆落第だ」(樫文雄<陸軍上等兵>昭和14年1月31日の陣中日記、史料②)。

(史料)「さてお話し変わり、戦線ニュースをお知らせいたします。さる五月〇〇日北支〇東省の〇景というところに残敵が入ったとの〇報により、我が隊は早くも出動し、戦闘開始したるや約2時間位にて〇〇〇〇戦は終わり、その時、小生等〇〇名にて■■名の敵兵および兵器・爆薬等をぶんどり、意気揚々として本隊に帰りますと、早くも閣下[第一軍司令官梅津美治郎中将]より祝電あり」(高橋七三、昭和14年5月9日、史料④)[〇はみずから伏せ字、修正。■は検閲による黒塗り。現代仮名遣いに表現を改めた]

・日本兵の手紙に多く見られる決まり文句。「滅私奉公軍務に精励」、「粉骨砕身尽忠報国の誠を尽くし」など。遺言であっても、真情は決まり文句の裏にそっと隠して表現。

(史料)「お母さんよさらば。私もいよいよ国家のためお役に立つときが来ました。私は入営の際すでに身は大君[天皇]に捧げしものとして入営した私であります。男と生まれ一生一代の死に場所を求めることができ、こんな嬉しい愉快なことはありません。私は喜んで死んでいきます。ただ私の亡きあととは一家ごぞって幸福に暮らしゆく事、私は草葉の陰から祈っております。それから私が来前に植え付けてきた柿の木を大切に育ててください。あとは何も言うことはありません。白木の箱[遺骨]が届いたらどうか泣かずに褒めてください」(菊池武雄<曹長>1942年5月28日、史料③)。

・決まり文句が多かった理由として考えられる要素:①第一次世界大戦ですでに総力戦を経験していたドイツ(287億通に及ぶ手紙のやりとり)⇨多くの日本人にとって、組織的かつ頻繁な手紙のやりとりはこれが初めて。②マニュアルの果たしていた役割(一ノ瀬2021(2004))。入営した兵士のための兵営事情案内、軍隊についての非公式教科書、兵士と一般人との手紙のやりとりの例文集、兵士の入営・凱旋・葬儀の際に用いられる式辞・挨拶模範など、数多くのマニュアルが市販。「正しい」言動の細部に至るまでの規定→「誤った」言動を恐れて、マニュアルに依存。大戦末期には遺言マニュアルすら存在。③そうした決まり文句以外に自分を納得させる言葉を彼らが持たなかった。赤紙一枚によって徴兵され、市民としての生活を奪われ、生命の危険にさらされた彼らにとって、そうした自分の現状を合理化するうえで、そうしたプロパガンダ用語以外に自分の思いを託す言葉がなかった(鹿野2005:154)。状況はドイツ兵もそれほど変わらない。「ギャングたち」「ヤンキー」といったプロパガンダ用語の頻用。④そうしたプロパガンダに部分的には賛同していた側面(森岡1995)。国や民族なくして自分の存在もない=ドイツ兵にも見られる意識。「決定的に重要なのはドイツ民族です。それが機能しなくなってしまうと、それでおしまいです」(1944

年10月28日、兵卒 F.S.)、「我々には、よい結末を迎えるまで戦い続け、それによってすべての血の犠牲やドイツ民族の苦しみが無駄ではなくなるようにするという可能性以外残されていません」(1944年11月13日、軍曹 H.W.)

★しかしそれでも、日独兵士の暴力の語りには、共通点が多い。

【2】ドイツ兵の戦争経験と「暴力」

・ドイツの野戦郵便研究における共通認識：戦闘・破壊・死といった戦場の現実、書かれるとしても自分が直接関わる事のない受動的な経験として描かれることが多い。とくに能動的な殺害行動やむき出しの暴力など、生々しい戦場の描写はタブー。ユダヤ人迫害やホロコースト、性をめぐり問題といったテーマもほぼ沈黙。逆に、健康状態・衣服・食事・宿営・衛生状態・天候といった、銃後でも理解できる日常的な要素が前面に出てくる。

・ただし戦時暴力の描写自体は決して少なくない(小野寺 2012)。戦友の死や負傷、もうもうと煙を上げ、炎上する、あるいは廃墟となった家屋や、砲弾が飛び交う戦場の様子など。

・とくに兵士たちが詳細に記していた要素

①暴力への恐怖。

「私は今、短時間ではあっても戦争をこの目で見ました。もう十分です。残酷なものです。『そこにいたことがある人』でなければ全くわからないでしょう。ここ数日私は主に航空機と対峙してきたのですが、もううんざりです。この感覚。爆弾が投下される様子を目の当たりにする。爆弾を見る。ちっぽけな点々が降ってきて、直接自分の上へとやってくる。縮こまりながら轟音を立てて過ぎ去っていく音を聞く。もう何も考えられない。思考の停止した空間。そして爆裂音と地面の震動。すさまじい雷鳴。泥と埃が顔に飛び散る。そして死の静謐さ。そう見える。航空機は陣地に対して集中砲火を浴びせ、高射砲は狂ったように音を立てているにもかかわらず、爆弾が落ちてくる。まだ生きている。傷も負っていない。他のすべてのことは遮断されている。そして再び徐々に。手探り状態で意識を取り戻す。何が起こったんだ。何が起きたんだ？

(中略)大量の爆弾が投下され、体が振動したときにどんな気分になるかは、筆舌に尽くしがたいものがあります。投下の様子をはっきりと見えます。自分の上へと降ってくるのが。私はこの日は道徳的にも精神的にも肉体的にも、完全に参ってしまいました。眠りにつくこともできませんでした。戦友の絵が脳裏から離れなかったのです。突然人生からいなくなってしまった戦友の。これが私の初めての戦闘投入の日でした」(上等兵 E.M., 1944.6.7)。

②暴力による感覚のマヒや、神経の疲弊。「我々の神経は完全に衰弱してしまいました。ロシア軍の爆撃機がやってくると、我々はがたがたと震え出します」「一日中爆弾による攻撃があり、神経が休まることはありませんでした」。トラウマとなる暴力経験。

「この光景から逃れることが出来ないのです！人生の苦さについて何も知らなかった子どもの頃のような、あるいはその後にもあったような、素晴らしく調和の取れた気分を呼び覚まそうと努力するたびに、この死者、非人間的な戦争の何百万人もの哀れな犠牲者が何度も何度も[自分のことを忘れるなど]警告してきて、むき出しの現実へと引き戻すのです」(上等兵 E.M.,

1944.12.22)。

③自分の身に何も起きなかったことは幸運、奇跡、運命。

「しかしよき星を信じてはいても、別の声が常に私へと呼びかけてくるのです。おまえも斃れるかもしれない！非常に多くの人びとが今までくたばらざるを得なかったし、おまえがその場にいなかったのはただの偶然なのだ、と。いつでも容易に起こりうるのだ、と！非常に忌々しいことですが、兵士の死というのがいかにあっけなく、また偶発的なものであるか、今まで目の当たりにしてきました」(同じく上等兵 E.M., 1944.12.17)。

「自分と自分の中隊に昨日起こった出来事はあまりにも恐ろしいことで、あなたがたに書けるようなものではありません。私がまだ生きているというのは、神の奇蹟以上のものです」、「もし我々が故郷にたどり着くことができるのなら、それは神の摂理によるもの以外何物でもありません」(上等兵 H.R., 1944.11.25)。

④粗野な軍隊・戦場の雰囲気へと染まっていく自分(たち)への自覚

・(野菜を炒めるのに工業原料であるひまし油と灯油を使って)「それはいかがなものかとあなた方は思うことでしょうし、吐き気さえ催すかもしれませんが、是非一度試してください、きっと美味しいです」(兵長 W.H., 1944.1.23)

・「日々必要なことは、夜にしなければいけません。日中には小便は瓶の中に、クソ Häuflein はシャベルの上にします」(二等兵 W.M., 1944.11.8)

・「まるで弾が自分を避けて弧を描いて飛んでいくかのような感覚」を得た。「冷静な頭で考えれば滑稽で馬鹿馬鹿しいことかもしれませんが、多くを乗り越えていく上でものすごく助けになります」(二等兵 ?E.M., 1944.9.28)。

・(負傷によって本国の兵舎へと戻った時、寒さをしのぐために椅子をばらして薪替わりにした)「もちろんそのことは大いなる憤慨を巻き起こしました」(ハインリヒ・ベル、1944.5.10)

⑤戦争暴力への批判的な眼差し

「無意味な殺害にいつ終止符が打たれるのでしょうか」、「私の中では、なぜ今日のような馬鹿げたことが、という決して応えることのできない問いがくすぶっています。なぜ人間はこれほどまでに、恐ろしいほどまでに愚かで残酷なのでしょう」(二等兵 W.W., 1945.3.19, 4.10)

「20世紀の進歩というのは爆弾のトン数によってのみ表現できます。それこそが、20世紀がその前半に人類へともたらした全てなのです。全世界が破裂してしまえばいいのにとすることが時々あります。そうすれば、馬鹿げたことも、嘘いつわりも、殺戮もみななくなるでしょうから」(上等兵 E.O., 1945.3.28)

【3】日本への戦争経験と「暴力」

★本質的には、ドイツ兵の記述とさほど変わらない。

①・③

「三月四日我々はある地点を出発して帰り道です。午後の四時過ぎ、敵の陣地を横切らんとした際、猛烈に攻撃されて一歩も進めなくなりました。山砲は土煙を上げて炸裂し、重機関銃、軽機

関銃、小銃は小山谷にこだまして、山はうなり、地は裂けなん位でございました。敵弾は地雷のようにバラバラと頭上をかすめます。異様なうなりを立てて飛んでくる弾は、ぱっと土煙を上げて前に後ろに、左右に落ちてきます。ああ…その内の一弾に当たれば、我が肉体は永久に帰らぬのです。ブスリと不気味な音で荷物の上に落ちた弾は、缶詰を真っ二つにして荷物の奥深く入りこみました。それにもまして自分の馬の首筋を五、六寸かすめて鞍の前端にあたって小さい花を一枚はがして飛び去った弾を発見した時、冷水でも浴びせられたように感じました。馬も驚いたらしく、一声小さくいなきました。血はタラタラと流れているけれど今手当てをすることもできません。

そのうちに支那馬が一頭足をやられて真っ赤な血を付近一帯にそめて倒れました。

あっちでも、こっちでも馬がやられた、上等兵がやられた、人がやられたとぞわめき立ちます。私は今日は穴の中で黙って隠れているばかりです[……]過ぎし激戦の後を省みて、あれほど弾の中をくぐって一発のかすり傷も受けなかったということは、全く生産神様のご守護によるものと深く感謝し、厚く御礼申し上げた次第です。今後とも神仏をお祈りください。お願いいたします。今後は今以上の危険地帯ですから生きて再び帰れるか知るよしもありません」(佐々木徳三郎<陸軍軍曹>、日付なし、史料③)。

④粗野な軍隊・戦場の雰囲気へと染まっていく自分(たち)への自覚

・「事実、形勢ははなはだ悪く、敵の砲弾も日々何百発と飛来します。また小生どもの経験している空襲に遭ったら内地の一般人などは阿鼻叫喚、戦慄で気が狂うでしょう。十間[約 18 メートル]と隔たぬ箇所に爆弾が落ちたのも一度や二度ではありません。しかし、自分は平気で昼寝もし、悠然と構えている。なんら周章や戦慄は感じない。防空壕の中で、爆風が鼓膜を破るから耳に指を突っ込み聞いている」(西村秀八<陸軍伍長>、昭和 18 年 8 月 26 日、史料②)

・「転戦ようやく半年に近く、人も殺したし、敵前上陸もしたし、鳥や豚を料理することも覚えたし(弱虫の小生が血だらけになって豚の腹を裂く図を想像してお笑ください)、兵隊一通りのことはしてみたが、一皮むけばまだ応召前の小生と少しも変わらない。いつになったら“逞しき兵隊”になれることや、お恥ずかしき次第」(近藤孝三郎<陸軍上等兵>、日付なし、史料②)。

⑤戦争暴力への批判的な眼差し

「最近の書物にちよいちよい見られるのは戦争の倫理性ということである。戦争の倫理性なんてあり得るものであろうか。人を殺せば当然、死刑になる。それは人を殺したからである。戦争は明らかに人を殺している。その戦争を倫理上是認するなんて、一体倫理は人を殺すことを是認するのか。大乘の立場、大乘の立場[大局的観点]と強調される。大乘の立場から戦争を見るなら何故人を殺さぬでもよいようにしないのか。人を殺している間に大乘、小乗の区別はあるものか、すべて悪である」(松岡欣平<陸軍少尉>、昭和 18 年 10 月 4 日、史料①)。

★ただし②は(知る限りでは)あまり見当たらない。「男の中の男」である軍人となるためには、軍隊教育の中で「感情」をコントロールできるようになることが必要であり、私的制裁をはじめとするあらゆる苦難は、「感情を冷静にし、精神を混乱せぬようにする」心理的修養上不可欠なものであり、このような苦難を乗り越えられない人間は「日本男子」ではない(中村 2018)

【4】日独兵士の戦争経験を分かつもの—(1)私的制裁

(1) 日本軍兵士の手記に現れる私的制裁

・「十二月の末、一月の初め頃は上靴[スリッパ]で殴られ、帯革で殴られたりしていた。飯のつけ方が遅すぎるといって二時間も立たされた末、散々蹴られたり、殴られたりしたりするものもあった。君も知っているとおりに、動くことの無精な、要領の悪い私もまたその例に洩れなかった。[…]何度も殴られて、床の中に突き飛ばされた時は、痛いよりも悔しくて、実際寝床の中で泣かなければならなかった」(菊山裕生<陸軍少尉>、昭和19年4月25日、史料①)。

・「いいと思っていた戦友も、いよいよ本性を現してきました。一日に二回くらいの割合で殴られています。兵営内には一人として人間らしい者はいません。自分も人間から遠ざかったような気がします」(福永五郎、昭和16年2月1日、史料①)。

・ある兵士は日記に、軍隊内で流行っていた歌を書き記している。

軍隊流行歌(数え歌)(六)「点呼が済んだその後で／鉄拳制裁雨あられ／泣き泣きもぐる床の中／夢は故郷の母の顔」(市井柔治、日記、史料①)

(2) 日本軍における私的制裁

①公式には禁止されていたが、実際には黙認。将校が部下に絶対的に服従させる手段として私的制裁を重視(一ノ瀬2009)。「昨日はOを、今朝はNを殴った。昔の私しか知らない父母は、その時の私の目にきっと一驚されることであろう。しかしこの基地隊の中で、一つの団結をつくろうとするものには、これが不可欠の要素なのである」(和田稔<海軍少尉>、昭和19年12月30日、史料②)。

②「いじめられて鍛え上げられた兵隊は、耐久力があって敏感で、戦場に出たとき境遇に速く慣れる」、「死ぬ率が少なくなる」(伊藤2008:126)という認識の幅広い共有。

③暴力の「委譲」。一年目にいじめ抜かれた兵士が、二年兵になると一年兵をいじめて「仇を討つ」/B級戦犯としての朝鮮人、台湾人。日常的にビンタのような暴力を受ける一方、収容所の捕虜に対してビンタや殴打(林2005)。

④私的制裁を訴える兵士は、圧倒的に高学歴兵士たち。都会と農村での暴力観の差違。

(3) ドイツ兵士の手記と私的制裁

・上官によるしごきや嫌がらせに関する記述<自由時間に点呼する、外出時間を守らないと厳罰に処せられる、完璧に掃除していても、むりやり汚れを見つける、無意味な掃除のやり方>は数多い。

「ほとんどの時間を平身低頭で、ののしり言葉の連続射撃が自分の上を通り過ぎるのをやり過ごしていました。彼がドア越しに部屋を覗くたび、われわれは全員地面に這いつくばらなければいけませんでした。しかも、我々が時間がないときに限ってやらせるのです。一分間の間に最大3回から4回。あまりにひどすぎます。そのような東洋風の敬神は、自分の自尊心とは相容れないものです」(伍長L.K., 1942.11.24.)。

・部下を直接殴ったり蹴ったりする記述は、いままで一例のみ。クルト・マイヤー武装親衛隊少佐が脱走兵にびんたしたという記述(Craig 1998: 56)など皆無ではない。

・しかし、暴力がかなり少なかったことはおそらく事実。「民族共同体」観念や戦友意識の違い？

【5】日独兵士の戦争経験を分かつもの一(2)生々しい暴力の記述

(1)日本兵による暴力の記述の「生々しさ」。

・「[1937年]11月5日、上陸地点で最初17、8歳くらいの正規兵が、日本刀でバツサリやられているのを見たときは、飯の味もなく、飯も食べぬ位でしたが、その後毎日毎日目撃、その数何百何十、中には頭の砕けているものがある、脳味噌の流れているものがある、肩を切られているもの、黒焦げに焼かれているもの、野犬にその肉を食われているもの……等々、実に無数、また一同もこれに慣れ、その口や鼻に弾を撃った[後の]薬莖を突き込んだり、耳に竹を突き込んだり、裸体にしたり…わざと裸体として焼いたり、女を裸体とし仰臥せしめたり、さらにこれに悪戯をしたり…等々全くお話にならぬくらい」[兵士 W.T., 一ノ瀬 2009: 161]

・「去年の31日まで支那人の捕えたのを、毎日揚子江で200人ずつ殺したよ。川に手を縛って落としておいて上から銃で撃ったり、刀で首を切ったりして殺すが、亡国の民は実に哀れだね。まるで鶏でも殺すような気がするよ」(小池 1998)

(2)「面白い」「痛快」なものとしての殺害

・「土匪がまず、10人ほど穴の前に立たされたのだ。兵隊も10人、銃に剣をつけて並んだ。その間、三間ほど。隊長の「突け！」という号令一下、時ならぬ喚声とともに[……]血が走った。胸から背に銃口まで突き抜けたかと思うほど、傷口から血がどくどく流れでいる者もいる。[……]まだ生きている者もある。二人、三人[を]、また突いた。その度ごとに足をぐっと伸ばし手を伸ばし、痙攣を起こす。ブルブルと震える。死の断末魔だ」(新井 2007: 17)

・「12月27日の夜は、兵站部に[中国人が]食料を盗みに来たので、7人捕まえて銃剣で突き殺したが面白いものだったよ」「爆弾が爆発して命中して支那の兵がコロコロ死んでいく様はまったく面白く、人間のようにではありませんでした。見事なものだったよ」(小池 1998)。

・「片っ端から掃討を始め小銃や槍などを押収し9時ごろに全く終わりました。帰りがけに火を放って帰途につきました。一痛快でした」(千葉徳右衛門、小池 1998)。

・「ちょうど一か月前以前の討伐には夜襲をもって敵を包囲いたし戦闘を開始いたしました。敵の狼狽この上もなく逃げ惑うところを重機[関銃]軽機[関銃]の掃蕩にて将棋倒しにバタバタと倒れる、この面白きこと例えるものではありません」(菊池八兵衛、小池 1998)。

(3)なぜこのような記述が日本兵士には見られるのか？

①記述の多くは、匪賊(パルチザン)とされた中国人に関するもの。ドイツ兵にとってもパルチザンは、生存を脅かす大きな脅威。ただし、敵の正規兵や民間人にもこうした叙述。

「このような卑劣な手段によってここでは戦いが行われており、これからも断固とした処置を執るのみです。さもなくば我々は地域を支配することができず、ボルシェヴィズムに非常に近い立場の体制が権力を握ることになるでしょう」(兵長 W.H., 1944.4.9)。

「射殺するのが最善の解決方法です。根絶します。この地域はそうしたルンペンどもにはあまりに美しすぎますし、そのような自然の中で生きていくに値しません」(下級軍曹 H.S., 1944.11.11)

「その場で射殺し、財産に火を放つしかありませんし、我々はここでそうしています」(伍長 H.B., 1944.9.2)

②負ければ自分たちもこうなるのだから勝つしかないという、社会ダーウィニズム的思考。

・「戦に敗れたら日本人が敵国からこういう目に合わされるのだ。絶対に戦にだけは負けてはならぬ」(川島正<陸軍中尉>、昭和18年1月31日、史料①)。

・「哀れな支那人ですね。敵国人でありながら哀れだね。町の実況や市民の哀れな姿など内地の人々に見せてやって、戦敗したる国人の哀れさを見せ、日本国土を強くみせたいと思う」(小池1998)。

・「戦争中逃げ遅れた支那兵の婦女子は土穴に隠れ、我ら皇軍を見て、土に伏して手を合わせお許し下されよと言ひ、泣いて泣いて拝んでおる有様は、我々も同じ人間であり、もしや当支那国に生を受けたならこのような悲惨きわまるどころの憂き目にあうも免れえないのである。我々は幸いにして皆様と生を大日本帝国に生まれあわし、世界各国に比類なき国体を有し、つつがなく暮らしおる幸福さよ」(高橋千太郎、小池1998)。

★敗残国民がこのような目に遭うのはやむを得ないという共通認識。

③兵士たちの戦争観の「前近代性」

・日本兵は中世や近世の戦争観をそのまま現代の戦場に持ち込んだのではないか？(笠原2009)。放火・略奪・拉致連行は「中世以来の日本の戦争における慣行」、女性を強姦するのが「戦いのならい」という意識が、中国戦線の兵士にも見られる。

・日清戦争でも、捕虜の殺害や略奪・放火が当たり前のように戦場からの手紙に書かれていた(大谷2006)。

★日独兵士の暴力観は多くの点で共通しているものの、①軍隊内の私的制裁、②生々しい暴力叙述において根本的に異なる。本報告はあくまで仮説段階／この二点は私たちの社会にとって「過去のもの」となっているか？

【公刊史料集】

日本戦没学生記念会 2005(1949). 『きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記』岩波書店
<史料①>

日本戦没学生記念会 2003(1963). 『第二集 きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記』岩波書店
<史料②>

岩手県農村文化懇談会編 1961. 『戦没農民兵士の手紙』岩波書店<史料③>

北上平和記念展示館編 2017. 『北上平和記念展示館の軍事郵便』北上平和記念展示館<史料④>

【参考文献一覧】

赤澤史朗 2000. 「「農民兵士論争」再論」『立命館法学』2000(3.4), 621-647 頁。

新井勝紘 2006. 「軍事郵便の基礎的研究(序)」『国立歴史民俗博物館研究報告』126, 67—84 頁

— 2007. 「パーソナル・メディアとしての軍事郵便—兵士と銃後の戦争体験共有化」『歴史評論』682, 12—26 頁

— 2011. 「「軍事郵便文化」の形成とその歴史力」『郵政資料館研究紀要』2, 1-17 頁

飯塚浩二 2003. 『日本の軍隊』岩波書店(原著:1950 年)。

一ノ瀬俊也 2021(2004). 『軍隊マニュアルで読む日本近現代史—日本人はこうして戦場へ行った』

— 2009. 『皇軍兵士の日常生活』講談社

伊藤桂一 2008. 『兵隊たちの陸軍史』新潮社

大江志乃夫 1988. 『兵士たちの日露戦争—500 通の軍事郵便から』朝日新聞社

大門正克 2009. 『戦争と戦後を生きる』小学館

大谷正 2006. 『兵士と軍夫の日清戦争—戦場からの手紙を読む』有志舎

小野寺拓也 2007. 「歴史資料としてのドイツ野戦郵便—第二次大戦期の国防軍兵士」『歴史評論』682, 3—11 頁

— 2008. 「歴史研究の「マイクロ過程論的転回」—「ゴールドハーゲン後」のナチズム・ホロコースト研究」『歴史学研究』840, 19—27 頁

— 2009. 「危機的状況に現れる「真の顔」—第二次大戦末期のドイツ社会・国防軍をめぐる近年の研究から」『ヨーロッパ研究』8, 173—184 頁

— 2011. 「両大戦期ドイツにおける史料としての野戦郵便」『歴史と地理—世界史の研究』228, 26—33 頁

— 2012a. 『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」—第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』山川出版社

— 2012b. 「「社会知」と暴力経験—第二次大戦末期ドイツ国防軍兵士の野戦郵便から」『ヨーロッパ研究』11, 91—105 頁

- 2012c. 「ナチズム研究の現在—経験史の観点から」『ゲシヒテ』5, 33—51 頁
- 2012d. 「エイジェンシー(行為主体性)と「被害と加害の重層性」—第二次大戦末期のドイツ国防軍兵士の野戦郵便から」メトロポリタン史学会編『20 世紀の戦争—その世界史的位相』有志舎, 65—120 頁
- 2012e. 「「穏やかな」戦場のメリークリスマス 1944」『専修史学』53, 1—36 頁
- 2013 「過程的な問い、引き出されるアクチュアリティー『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」』の舞台裏」『歴史学研究』912, 39—49 頁
- 2016 「ナチ「民族共同体」論の射程—道徳・感情という視点から」『ゲシヒテ』9, 35—47 頁
- 2020 「感情と情報リテラシーが交差するところ—噂、ニュース、エゴ・ドキュメント」長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、205-244 頁
- 2022 「兵士たちから見た世界大戦」歴史学研究会編『「歴史総合」をつむぐ—新しい歴史実践へのいざない』東京大学出版会、146-152 頁
- 笠原十九司 2009. 「日本軍・日本兵による性暴力の意識と構造—「前近代」の「日本の戦場」の継承」『歴史学研究』849, 11-19 頁
- 鹿野政直 2005. 『兵士であること—動員と従軍の精神史』朝日新聞社
- 川島真・岩谷將編 2022. 『日中戦争研究の現在—歴史と歴史認識問題』東京大学出版会
- 河野仁 2001. 『「玉砕」の軍隊, 「生還」の軍隊』講談社
- 2006. 「日中戦争における日本兵の士気—第三七師団を事例として」波多野澄雄・戸部良一編『日中戦争の軍事的展開』慶應義塾大学出版会, 249—280 頁
- 小池善之 1998. 「南京事件を追う—軍事郵便の中の日中戦争」『静岡県近代史研究』24, 111-125 頁。
- 後藤康行 2007. 「メディアとしてみる軍事郵便—パーソナル・メディアという視点から」『専修史学』43, 8-20 頁
- 2017. 「軍事郵便によるコミュニケーションの形成—個人と社会にまたがる二重構造」『メディア史研究』42, 25-45 頁
- ヴォルフガング・シヴェルブシュ 2007. 福本義憲・高本教之・白木和美訳『敗北の文化—敗戦トラウマ・回復・再生』法政大学出版局
- 寺戸尚隆 2008. 「軍事郵便の検閲と民衆の戦争意識への影響—その史料としての有効性について」
- 財満幸恵 2010. 「戦中の軍事郵便とその検閲について」『昭和のくらし研究』8, 31—52 頁
- 高田理恵子 2008. 『学歴・階級・軍隊—高学歴兵士たちの憂鬱な日常』中央公論新社
- ゼンケ・ナイツェル、ハラルト・ヴェルツァー 2018. 小野寺拓也訳『兵士というもの—ドイツ兵捕虜盗聴記録に見る戦争の心理』みすず書房(原著:2011 年)
- 中村江里 2018. 『戦争とトラウマ—不可視化された日本兵の戦争神経症』吉川弘文館
- 林博史 2005. 『BC 級戦犯裁判』岩波書店

- 藤井忠俊 2000. 『兵たちの戦争—手紙・日記・体験記を読み解く』朝日新聞社
- 森岡清美 2011(1995). 『若き特攻隊員と太平洋戦争—その手記と群像』吉川弘文館
- 山辺昌彦 2003. 「軍事郵便に見る兵士と戦場論」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 101 号、61-72 頁。
- 吉田裕 2005. 『日本の軍隊—兵士たちの近代史』岩波書店
- 2017. 『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』中央公論新社
- Craig, W. H. Luther 1988. *Blood and Honor: The History of the 12th SS "Hitler Youth" 1943-45*, Atglen.
- Schröder, Hans Joachim 1985. *Kasernenzeit. Arbeiter erzählen von der Militärausbildung im Dritten Reich*, Frankfurt/ New York.